

5-5

個別株の売買シグナルに 「株価指数」を使う策

◆◆◆ 日経平均先物の移動平均も個別株の売買シグナルになる

前節では、個別銘柄の「引値が前日比上昇だったか、下落だったか」や、「寄値が前日引値より高かったか、安かったか」という、その銘柄自身の値動きをシグナルにする例を見ました。

当然ながら、この売買ストラテジーが有効と見られるのは「上がった日の翌日も上がりやすい」、「高く寄り付くと売られて陰線になりやすい」といった値動きの性格が鮮明に出てくる銘柄です。過去データの検証結果をグラフ化してみたところ、累積の利益の推移が上がったたり下がったりで、右肩上がりにならない、つまり、「順張り型とも逆張り型とも言えない」、値動きの性格がはっきりしない銘柄には、この売買は適用できません。

では、その場合、どんな糸口から売買ストラテジーを考えればよいかというと、ひとつには、その銘柄自身の値動きではなく、「市場全体」の値動きを売買シグナルにするという視点があります。

何度か述べてきたように、「市場全体」とは市場平均、すなわち株価指数であり、その代表ともいえるのは日経平均株価、あるいは日経平均先物です。4章でも少し紹介しましたが、「日経平均先物が前日比上昇した翌日、その銘柄は値上がりしやすい」「日経平均先物が前日比下落の翌日、その銘柄は値下がりしやすい」という、言うなれば、先物の値動きに順張り型の値動きをする傾向がある銘柄が、その売買対象として注目できます。

図 5-5-1 の2銘柄は、その銘柄自身の引値が「前日比上昇なら買い」

本気の<株>再入門、より サンプル

「前日比下落なら売り」という順張り売買では今ひとつのパフォーマンスであるものの、先物の前日比上昇下落をシグナルにした順張り売買では格段にパフォーマンスが向上する例です。

